立ち止まらない、青春

ハリデル

R65 FREE MAG

2021 SUMMER

VOL. 001

INTERVIEW

斎藤 吾朗_GOROH SAITOH

「人生はリレーだ」

重い荷物（1998年）

私達は地球に棲まわせてもらっていることを忘れていないだろうか。人間それぞれが生きていること自体、
地球を汚していることにつながる。後世の人々に少しでもいい環境を伝えるためにも一人一人が地球を背負っていることを自覚したい。

R65 FREE MAGAZINE | 2021 SUMMER VOL.001

日本人初!?

あのルーブル美術館（公認）でモナ・リザを模写！

豊川市のパワースポット

栄知村って知ってる？

美しい１枚を求めて。

スバルとカメラ、コーヒー＆シガレッツ

HAVE A NICE DAY!

焼肉、旅行、野菜、切り絵、いろいろなハツラツたち

大好きなわかめ！

食べても食べてもズル剥けだぞ、おい！

還暦・古希野球 **野球小僧を発見！**

仕事にハツラツ、趣味にハツラツ、スポーツにハツラツ。
定年後も楽しみながら毎日を送っているシニアの方々を見ていると、
うらやましいと同時に、なんだか元気がわいてきますね。
「ああ、こんな生き方をしてみたいな〜」
いま、働き盛りの方々も、いまのうちから生きがいを見つけ、
老後に備えることが、「ピンピンコロリ」に近付く秘訣かもしれません。
さあ、65歳以上のシニア世代のハツラツぶりを思う存分、楽しんでください。

赤は元気になる色。
ハツラツで特別な色。

斎藤さんはルーヴル美術館で何をした？

Louvre Museum

画家 **斎藤吾朗**（74）愛知県西尾市在住

「人生はリレーだ」

Interview with GOROH SAITOH

1973年、ルーヴル美術館で「モナ・リザ」を日本人初の公認模写した斎藤吾朗さん。その後、強烈な赤を基調とした油絵を制作し続け、日本国内だけでなく海外でも高く評価されている。しかし今に至るまでには、夢を描いて渡ったヨーロッパでの自信喪失による苦悩があった。今回のインタビューではその苦悩を打ち破った桁外れた行動力と出会った多くの人々とのエピソード、そして今もなお制作活動を続ける「ハツラツの源」を探った。

TEXT_MASA　PHOTO_ana

描けば描くほど（2002年）

アルタミラやラスコーの洞窟壁画など、旧石器時代から人々は絵を描くことに特別な意義を抱いてきた。以降、有名無名を問わず絵描きたちが数多くの名作をこの星に残している。輝くばかりの絵描きの渦の中で、多くの影響を受けながら、私も私にしか描けない絵を目指して絵筆を走らせている。

家のいたる場所に落書きしていたが、母は怒るどころか、それを誉めてくれた。

_ VOICE

仏壇に描いた落書きを拝んだ母 夢を叶える場所 パリへ

愛知県西尾市寺津町出身。呉服屋を営んでいた両親の2番目の子として生まれた斎藤吾朗さん。

「中学2年生から油絵を始めてちょうど60年。物心ついた時から絵を描いていて、壁や襖など、家のいたる場所に落書きしていたが、母は怒るどころか、それを誉めてくれた。ある日、仏壇の黒い扉に白いチョークで仏様の絵を描いてしまったけど母はその仏様に手を合わせて拝んでくれた。子供ながら怒らなくて良いのかと思ったんですけどね」

自由奔放に育ててくれた母の影響もあり、小学生の頃に絵描きになると決めた斎藤さん。そのために芸術の都・パリに行くことを決めていた。

「油絵は昔、西洋画と言われていた。私が子供の頃は日本が戦争に負けて、外国の文化は高くて、日本の文化を低いと思わざるを得ない状況で舶来コンプレックスとなっていたんです。だから油絵を学んで、いつかパリに行こうと決意しました。そのために高校時代は英語ではなくフランス語を習っていました。その頃から自分に何が必要で不必要か選択していましたね。パリに飛び立つ前に、外国へ渡る人は盲腸切っていけと言われ、痛くもない盲腸を切ったのは今では考えられないですよ（笑）」

自分自身の絵が見つからない ダ・ヴィンチからの メッセージ

斎藤さんは26歳でパリに降り立ち、美術館巡りやスケッチなどをして芸術の都・パリを満喫していたが、あることに気づいた。

「セーヌ河畔で自分が描いたスケッチブックを見ていたら　自分自身の絵がないなと気づいた。先人の絵描きたちの絵を真似ているだけだった。斎藤吾朗の絵は何だろうと悩んでしまったんです」

斎藤さんは自分探しの旅、何を描くべきか探すために北欧諸国から訪れ、ドイツ、オランダ、スペイン、イタリアを巡った。

「多くの国々を巡るとオランダにはゴッホがいたり、ノルウェーにはムンクがいたりとか、イタリアにはミケランジェロがいたりとか　それぞれの国、土地にはそれぞれの絵描きがいることに気づいたんです。そしてスペインに行った時にアフリカのサハラ砂漠

浴衣姿でパリ市内を巡っていた斎藤さん。「当時のパリでは“日本芸術・ジャポニズム”が好意的に受け入れられていたので、日本の正装である浴衣を着て日本人であることを知ってもらおうと思いました。そして何でも見て、記憶して、自分の絵に活かそうと思っていました」。

Who is Mona Lisa?

Mona Lisa

1974年　モナ・リザの全国巡回展のために描いた追加の作品。一番左はルーヴル美術館での公認模写。2番目はゴッホ風、3番目はダリ風に描き、4番目は斎藤吾朗風に赤絵で描いた。「先人の画風を真似ることで自分の画風が見つかり、個性が出てくる」と斎藤さんは語る。

からきた青年に出会って『サハラ砂漠に行くと自分っていうものが見えるぞ』と教えられました。サハラ砂漠を野宿しながらずっと放浪していたら盗賊に遭遇してしまい、怖い思いをしたんですが、盗賊は私が絵描きだと分かったらすごく親切にしてくれて、『絵を描く奴に悪い奴はいない』と言ってくれて一緒に食事をしました。その時、絵というものは万国共通語だということを実感しましたよ。そして別れの際には『頑張れよ』と盗賊たちに励まされました。

その後、冬のパリに戻りましたが零下になって外で絵を描けませんし、お金もなくなってきて家の中でできる模写をしようと考え、どうせ模写するなら故郷で待っている母へのお土産となる絵を描こうと思い、私の母がルーヴル美術館の絵で知っている絵画というとモナ・リザしかないと思ったんですね」

モナ・リザの公認模写はそれまでマルク・シャガールしか許されたことがなく非常に高い壁でしたが10日間座り込み同然で懇願したそうです。

「モナ・リザは絶対無理だと美術館から言われたが私は『国で年老いた母親が待っているので何とか頼む』と伝え、日本から持参した浮世絵のマッチや切手を渡したり、マッサージしてごますったりとか、おにぎりを食べさせたり必死でした。そして最後に鉛筆でモナ・リザのデッサンを見せたら、副館長が『お前には負けたよ』と言ってくれた」

「モナ・リザ模写」を始めた斎藤さんでしたが、「斎藤吾朗の絵とは何だろう」の答えは見つかっていませんでした。

「サハラ砂漠での盗賊との遭遇で、絵には力がある、訴えるメッセージがあるんだということは体感できましたが、テーマを何にすべきか迷っていました。でももう描くしかないと思い、模写すれば何か得られると思って必死に描きました。模写しながら思ったのはモナ・リザって誰なんだろうな？自分なりに思ったのはこれはダ・ヴィンチのお母さんかなって想像しました。ダ・ヴィンチは産んでくれたお母さんと3か月後に別れていて、自分を産んでくれたお母さんの面影を描いていたのかなと純粋に思えました。そしてバックに描かれた山や川の風景はダ・ヴィンチが生まれたヴィンチ村の風景にそっくりだと気付きました。

モナ・リザはお母さんと故郷を描いた絵だなと自分なりに解釈し、ダ・ヴィンチのメッセージが私の胸に強烈に届きました。『絵というのは身近なものを描けば良いんだよ』と、500年前に描かれた絵からメッセージを受けました。

500年前のモナ・リザが、ダ・ヴィンチが私を導いた

_ VOICE

上／スペインのセゴビアにて
ヨーロッパでは「ゴッホ、ダリ、ミケランジェロなど先輩たちの足跡を辿るために鉄道で周遊していました」

はるばるパリまで来て絵を描いていたのに、自分が描くべきものは日本であり、生まれ育った三河地方であり、母であり、故郷の人々だとダ・ヴィンチが描いたモナ・リザから気付かされました。26歳で目から鱗が落ちました」

赤い絵に込めた想い「赤は元気になる色、ハツラツで特別な色」

パリから帰国した斎藤さんは真っ先に自分の故郷三河のお年寄りを描き始め、同時に自分自身の画法も見え始めていきます。

「三河の空気を吸って三河の土を踏んでいる人を描こうと思い歩き回った。ちょうど帰国したのが2月で西尾市の天下の奇祭・鳥羽の火祭りや岡崎の滝山寺の火祭りが行われていて、赤い炎が目に焼き付いた。また夕焼けもとても綺麗だった。冬のパリは暗くて午後3時くらいから暗くなるんですよね。そして足元を見たらパリの黒土と比べ、三河の土は赤色ですし、自分の故郷が赤く見えたんですよね。だから自分の絵、斎藤吾朗の絵は赤色を強く打ち出したものにしようと決めました。もともと赤は元気が出る色ですから」

斎藤さんが描く絵には歴史に造詣が深いメッセージを込めていることが特徴で、赤にこだわっている理由を風土や火祭りだけではないことも語ってくれました。

「三河は赤いものが多いんです。高浜市の三州瓦は赤瓦が元なんですね。戦後流行した「緑の丘の赤い屋根」という歌があって、三州瓦の歌なんですね。三河のえびせんべいはアカシャエビが使われていて、三河の赤鶏は名古屋コーチンに比べて赤いんですね。名鉄電車も赤色ですし、赤味噌もありますね。他の地域と比べても赤いものがすごく多いんですね。赤は元気が出る色でハツラツだと思うんですよ。現在はコロナウィルスの感染が深刻ですが、天然痘が流行したときに東北地方では赤べこを置いたりしたそうです。赤は魔よけの色だと思うんですね。女性の口紅も変なものが入らないように口紅を塗ったことが始まりだと言われていますし、赤は特別な色だと思います」

三河地方には日本のすべてがある

「世界中巡ってきましたが三河にはすべてがある。南から黒潮に乗ってきた民族と北からの寒流に乗ってきた民族が出会っています。その出会いにより現代の私たちに様々なものを与えてくれています。そのことをもっとみんなに知ってもらいたいですね」

矢作川もの作りの史
（2006年）

315年ごろ、大和武尊が一万本の矢を作ったことから矢作川と呼ばれるようになり、その河口に799年、崑崙人が棉の実と棉打弓をもって漂着した。日本に初めて棉が伝わったその時だった。そして三河木綿を紡ぐ船紡績が1879年に矢作川中畑橋付近で始まった。船紡績の噂を聞いた若き日の豊田佐吉はわざわざ見学に来て、自動織機の発明のきっかけになったと語っている。世界のトヨタに至る最初の一歩が西尾にもあったことを誇りにしたい。矢作川流域はもの作りの聖地ともいえる。

「人生はリレーだ」
自分がいただいたものを
次の世代に渡していくことが
人生の目的だ

現在74歳、油絵を始めて60年の節目となる斎藤さんの今後の目標とは。

「絵という字はいとへんに会うと書くんですが、私がルーヴル美術館でモナ・リザを模写したのもそうですが、モナ・リザという糸に出会って、ダ・ヴィンチという糸に出会えました。

私の絵は「赤絵」と呼ばれていて、赤絵は赤い糸に出会うと読めますので、私は幸せな出会いを演出することが出来たら嬉しいです。絵というのは動かないものですが人と人を繋げてくれることがあります。しかも時空を超えてダ・ヴィンチに出会えたり、ゴッホに出会えたりもします。現在インターネット全盛の時代において手書きの絵というのは不思議な力があると60年絵を描いてきて感じます。

私は絵を描くことでメッセージを伝えています。今後も絵を描いて100年先、200年先の人が観てくれたらいいなと思って楽しみに描いています。自分がいなくなっても絵は話し続けてくれますので次の世代、もっと次の世代にメッセージを伝えていきたいと思います。

私自身は500年以上前に描かれた「モナ・リザ」からメッセージをもらえ、自分が描く絵を導くことができました。人生というのはリレーだと思うんですね。自分がいただいたものを次の世代

モナ・リザ模写から（2012年）

ルーヴル美術館でモナ・リザを模写しながら、モナ・リザはレオナルドの母の像、背景は故郷ヴィンチ村の風景と悟り、自分もパリではなく、故郷の母や風物を描くべきだと考えた。帰国後、独立展を中心に最も身近な人々や祭り、風俗を描いてきた。

あしあと（2000年）

恐竜が滅んだあとの地球に人類が現れ、その凄まじい「あしあと」は他の生物の存在をおびやかし続けている。人類も恐竜と同じような運命をたどるのだろうか。人間が炎を手にした時から文明が始まり、その行方を動物たちは黙って見ている。

に渡していくことが人生の目的だと思うので、自分が感動したこと、良かったと思うことをたくさん伝えていきたいと思うし、やはり過去と未来は繋がっていると思いますので私自身、未来は明るいと思っています。

生まれ育った三河地方の魅力を知ってもらうために希望を持って絵を描いていきます」

最後に若い世代に伝えたいことを聞きました。

「今の時代は確かに便利になって何でも手に入るようになりましたが、自分の足で歩いて、自分の手でモノを作るっていうのは、人間だけしかできないことだと思うんですね。その過程で自分を見つめ、生きるっていうことがどういうことか見つけてほしいです。病気で人が簡単に死んでしまうかもしれません。でも命ってすごくしたたかでもあります。皆さんが作ったモノ・作品が100年、200年先に残っていったらこんな面白いことはないかなと思っています」

PROFILE GOROH SAITOH

斎藤吾朗（愛知県西尾市 74 歳）

強烈な赤を基調とした油絵は「赤絵」と呼ばれ、日本国内だけでなく海外でも高く評価されている。絵画に込められた多くのメッセージと独特な画法は観る人の心を捉えて離さない。また版画作品も数多く制作している。

1947 年 愛知県西尾市に生まれる
1971 年 多摩美術大学大学院美術研究科修了
1973 年 ルーヴル美術館でモナ・リザを日本人初の公認模写
1974 年 第 18 回シェル美術賞展で 2 等受賞
1977 年 国際ナイーブ美術展（ユーゴスラビア）に日本代表として出品
1986 年 ハーバード大学芸術学部特別講師
1988 年 愛知県芸術選奨文化賞を受賞
1990 年 個展（ニューヨーク・ジェイン・ギャラリー）開催
1998 年「モナ・リザ」から赤絵「風土記」・斎藤吾朗の世界展（伊東・池田 20 世紀美術館）
2001 年 Asian Arts Now2000（ラスベガス美術館）実行委員長
2002 年 ニューヨーク・グランドゼロ路上展実行委員長
2009 年 個展（宮城県大崎市 絶の館）
2015 年 熱田神宮宝物館に「熱田神宮・創祀千九百年」常設展示
2016 年 中京テレビ放送新社屋 IF ロビーに「中京テレビを創る人々」常設展示
2017 年 斎藤吾朗の描けば描くほど－モナ・リザ模写から赤絵へ－（刈谷市美術館）
2021 年 吉良氏 800 年祭実行委員長

三州西尾の岩瀬文庫（2011年）

アトリエのすぐ近くにある岩瀬文庫は、肥料商、岩瀬弥助さんが独力で明治41年に創設した図書館。海外でも評価の高い岩瀬文庫を今は西尾市民が守っているということを誇りにしたい。

Interview with
Yasuo Ando

喫茶店オーナー
安藤 康生（69）愛知県豊川市在住

「自然と笑顔に」

ある時は香り立つコーヒーを淹れ、
ある時は写真家仲間たちと作品を褒め合い、
ある時は的を目掛けて集中力を研ぎ澄ます。
定年と共に建てた自慢のカフェで文化振興に寄与し、
スポーツも堪能する。
そんな安藤さんの生きがいを紹介する。

TEXT&PHOTO_HIRO

いままで
やったことのない、
まったく違ったことを
やってみたかった

_ VOICE

カフェギャラリー
流木アート
アーチェリーで
ハツラツ!!

まるでおとぎ話か、メルヘンの世界のようだ

とんがり帽子のように中央が三角形の屋根に、天へ突き出た煙突。クリーム色の壁に、木でできた扉。ベンチには流木で作られた人形が座り、くつろいでいる。夏は建物を青々とした木々が取り囲み、冬は薪ストーブの火が店内を暖かくする。

愛知県豊川市国府町。音羽川の近くにある「カフェ・ギャラリー栄知村（えじそん）」だ。オーナーは安藤康生さん、69歳。定年退職から約1年後の2012年10月にオープンさせた喫茶店だ。

「いままでやったことのない、まったく違ったことをやってみたかった」。地元の製造企業で38年間勤務し、設計などの業務に携わっていた安藤さんは、カフェのオーナーという新境地に挑戦した。学生時代、ウェイターのアルバイトをしていたことがあり、接客業は少なからず経験があった。妻の貞子さんも快諾してくれた。店舗の建設費用は約4000万円。退職金はほとんどつぎ込んだ。夫婦は子宝に恵まれなかったが、安藤さんは「もし子どもがいたら、お店は開かなかったかもしれないね。何も言わずについてきてくれた妻に感謝です」と話す。

もともと写真が趣味で、定期的にブログに作品をアップしていた。ブログのハンドルネームが、店名でもある栄知村だった。「世界中でひとつしかない名前にしたかった」と、世界的な発明家の名前に好きな漢字を当てた。

コーヒーや、ケーキなどの軽食でお客さんをもてなすだけでなく、栄知村の最大の魅力はギャラリーだ。奥の10畳ほどの部屋で、地元の作家らが個展を開く。週単位で、開催料は一日2000円。絵画展、写真展、ハンドメイドなど、ジャンルはさまざま。ブログで発信していた頃の仲間から、開店後に交流を深めた作家による個展もあり、ギャラリーが開かれていない日はほとんどない。約半年後まで、大半の週が予約で

カフェ・ギャラリー栄知村

愛知県豊川市国府町的場 10
TEL ／ 0533-88-5110
営業時間／午前 9 時〜午後 5 時
定休日／日曜日、月曜日
名鉄国府駅西口から西へ徒歩約 7 分。東名高速・音羽蒲郡インターチェンジから豊橋方面へ約 3 キロ。国府駅前を右折して約 500 メートル。

埋まっている。「いろんな人が来て、気軽に文化を楽しめる場所になればいい。作家さん同士が情報を交換したり、無趣味の人もここに来て刺激を受けて、何かをやりたいなと思ってくれればいい。この栄知村が、文化発祥のお手伝いになれば嬉しいね」と話す。

安藤さん自身も写真だけでなく、冒頭に紹介した人形のような流木アートを楽しんでいる。太平洋に面した海岸の砂浜に行っては、奇抜な形をした流木を拾い集める。天井から吊り下げる飾りだけでなく、店の玄関のドアノブにも使っている。ワニのような形をした流木は、子どもたちに喜んでもらおうと近隣の保育園に寄付した。

安藤さんには喫茶店オーナーや写真家、流木アーティストとは別に、アーチェリー選手という肩書きもある。大学生だった 18 歳から続けて、競技歴は 50 年以上。いまから約 20 年前には国体にも出場したこともある。現在は月に 1 回のペースで試合に臨むだけでなく、豊橋アーチェリー協会の副会長として子どもたちへの指導にも携わり、競技の普及に励んでいる。

安藤さんが「60 歳から 80 歳まで、最低でも 20 年はやろう」とオープンした栄知村は、来年 10 月で 10 周年を迎える。地元ではすっかり有名な名物店となり、県外から訪れる人も多い。元保育士でもある貞子さんともども、大好きな子どもたちにも笑顔で接している。店から歩いてすぐ近くの場所に学習塾があり、待ち合わせや、自主学習をしに来店する子どももおり、温かく迎えている。

「お店をやっていると、自然と気持ちが優しくなるよね。会社に勤めていた頃と違って、お客さんも来るからムスッとしてちゃいけないしね。若い人もお年寄りも集まって、家庭の延長みたいな場所になってほしいね。店の前の通りを歩く人が、この建物を見てくれるだけでもいい。パワースポットみたいな場所になればいいよね」

安藤さんは今日も、優しげな笑顔でお客さんたちを迎えている。

弓道は礼儀作法を重んじるけど、アーチェリーは比較的自由なんです。そこがまた良いんですよ。

— VOICE

桜が満開を迎えた3月下旬、岐阜県にある樽見鉄道の谷汲口（たにぐみぐち）駅に親父と二人でやってきた。この時期、有名な撮影スポットになっているらしく大勢のカメラマンが駅のホームに。地面に届きそうなぐらいの大きな桜が風に揺られ、コロナで窮屈になっていた気持ちが解れるようなのどかな空間だった。「中井精也ばりに撮らないかんな。風景の中に溶け込むような鉄道を…」と言いながら、レンズを夢中で覗き込む親父は今年で78歳。厳格な父だったが、ずいぶん昔より小さく感じるその背中をしばらく眺めていると、18歳まで一緒に暮らしていた記憶が蘇ってきた。しかも親父を取材だなんて…ちょっと照れ臭く不思議な気分のまま一緒に実家に戻った。

TEXT&PHOTO_anakitagawa

写真道楽　北川 邦彦

求めるのは〝郷愁〟

カメラ、スバル、タバコ

コーヒーでハッラッ!!

写真と人生

親父が写真を始めたのは約60年前、東洋レーヨン（現在の東レ）に就職した後、友人から譲り受けた「二眼レフ」写真機を手に入れたことがきっかけだった。会社の計らいで現像暗室を設置してもらい、現像から印画まで夜な夜な夢中になっていた20代だったという。

「当時、一眼レフなんて夢のまた夢だったなぁ。単純な二眼レフで友人を撮影したり、社内行事を撮ってたよ」。そこから8年後の28歳で結婚、その後念願のミノルタ一眼レフカメラを手に入れた。いよいよ作品撮りの人生が始まる、ちょうど姉が生まれた頃だった。

「とにかくシャッター音が良くて魅了された。125ミリ望遠を手にして、写友と若狭湾や白川郷に出かけたり。茅葺屋根、山里というか、自然風景ばっかり撮っとったなぁ…」

その3年後には私が生まれた。確かに昔から我が家には写真が溢れていた。アルバムに入りきらない膨大な写真や、フィルムロールがたくさん箱に入っていた。

でもそれは珍しいことではないと思っていたし、私が18歳の頃だったか、親父が昔使っていたレトロな一眼レフを手にして自分も好きなライブを夢中で撮っていた。

家族旅行や行事の度、親父はいつもカメラを覗いていたのを覚えている。

「あの頃は“写真道楽”って言葉があった時代だったからな…」と呟くと「そう、お金がかかって大変だったわよ〜」と台所にいた母が昔の写真をいくつか引っ張り出してきた。

確かに、今思えば家にあったあの量は“道楽”って言われてもおかしくないよなって。

「おじいちゃんも当時では珍しかった写真機を持っていて、写真が好きだったっておばあちゃんが言ってたよ。そういうところが似たんだね〜」と母が和尚だった祖父の話をした。

最近だと、新潟の棚田と山形の白川ダム湖の撮影に車で出かけた親父。この年齢になって長距離を運転することに心配をしたが、昔から運転好きの親父は母を連れて難なく最終の山形までスバルのレガシイを走らせ、この時期にしか撮れない白川ダム湖の水没林を収めた。

「夜明け」新潟県棚田

相棒はスバルと煙草と珈琲

「岐阜に住んでから雪の量がすごくて。当時、FF（前輪駆動）はスバルしかなかったから、そこからずっとズバルばっかり乗ってきたなぁ」と約50年ずっとスバルを乗り換え続けてきたことを思い返した。そういえば昔、唯一親父の歌声を聴いたのは谷村新司の「昴」だった。そんなにスバルが好きなんだなあって幼心に思った記憶がある。スバルのレオーネ（セダン）からレガシイのツーリング・ワゴンになり、遠出の撮影時には荷台を倒して寝れるようになったという。煙草もキャビンからウィンストンに変わった。

そして、真冬にも関わらず寝袋で車中泊して富士山麓の初日の出を狙ったりもした。ハンドルを握り煙草をふかし珈琲を飲みながら、最高の1枚を求めて各地へ。「でも、もう車で遠出はしないだろうなぁ」何年か前、親父が車にもみじマークをつけた時はちょっと驚いた。

1枚を求めて
レンズを覗き込む

平成12年ごろからデジタルカメラに変え、写友4人と中国（上海、桂林、西案など）へ4年間撮影旅へ出かけたくさんの写真を収めた。その後、「西美濃4人衆」として県のふれあいセンターなどで写真展示を行うなどその撮影活動はさらに加速する。

これまでに岐阜県美術展で秀作賞を受賞するなど、いくつもの賞を獲り新聞にも幾度か掲載された。「賞を獲ることは、そんな重要じゃないよ。それよりも、自分の目で見た風景を、自分の構図で自分なりに残しておきたい。たった1枚撮るために行くんだよ」

日本各地、中国やインドネシアにもカメラを持って出かけた。たった1枚のために靴の底を減らしてきた。「最近

今の愛車はスバル・レガシイ ツーリングワゴン、スバル一筋。スバルのエンジン音は近所の車とは明らかに違っていた。エンジン音が聞こえるとテレビを消して姉と部屋に逃げていた。車で山や喫茶店などいろいろな所へ連れて行ってくれた。片道約7時間、母のおにぎりを食べながら中央道や東名、山梨のおばあちゃん家へ向かう車窓の風景が好きだった。

**賞やコンテストは重要じゃない、
自分の切り取りたい一瞬を収めるだけ。**

_ VOICE

上 / 「川霧漂う」白川ダム湖の水没林。
左 / 40 年ぐらい前に撮影した余呉町の田舎風景、
木を組んでパネルに。
右 / 北海道の美瑛の風景を収めた写真集を自主出版した。

美瑛

は”灯台下暗し”。遠くのものに眼が奪われるけど、灯台の下も明るく見えるような行動を心がけようかと思い始めたな」。撮影で遠出をするのが全てじゃない。近所の草木や、風景などにも目を向けてみようと続けて話した。

渾身の1枚を長年追い求め、終わりのない作品作りに没頭している親父。

この歳で夢中になれる趣味があって息子としては安心だけど、その原動力ってなんだろう？「風景写真ばかり撮るのは自分の田舎に寄せる想いみたいなもんかなぁ…。求めるのは郷愁かな」

12 歳で父親を亡くし、16 歳で故郷を出た当時の田舎風景を追い求めているのだろうと思った。

寡黙で、不器用。言葉にできないから写真を撮り続けているのかも。

「夢？夢かぁ…。夢はないな」と言いながらも、意欲的に作品を撮り続けていくだろう。

そんな父親の背中を見てきた私も今年で 46 歳。理想の父親像は未だわからないが、老いてもハツラツとした毎日を送れる人生っていいなって思う。

暑い日が続きます、どうか体には気をつけて長生きしてください。

PROFILE

北川邦彦（1943年 12 月 3 日生まれ 77 歳。滋賀県出身・岐阜県揖斐郡大野町在住）

父・清（立禅）樺太生まれ。アイヌに日本語を教える寺小屋をやったのち、北海道、本州へと南下し、永平寺ほか、曹洞宗の修行、巡礼を行う。揖斐川の川の渡で、母・ゆりゑと出会い、結婚、その後、滋賀県の片岡村（現在の長浜市余呉町）にて、「喜見庵（きけんあん）」というお寺の住職に就く。

1943 年 昭和 18 年	12 月、邦彦誕生。お寺の息子として、小学生の頃からお寺を継ぐ準備の毎日だった。
1955 年 昭和 30 年	父・立禅が病死。まだ幼い邦彦がお寺を継ぐことができず、寺院を退去。母親の手により、姉、邦彦、妹 2 人の生活が始まった。
1959 年 昭和 34 年	中学校卒業と同時に兵庫県尼崎市の商家に就職。
1961 年 昭和 36 年	名古屋の叔父を頼って、「東洋レーヨン（現・東レ）」に再就職。名古屋市港区に暮らす。仕事も慣れてきた頃に、寮活動の中で、「写真クラブ」「絵画クラブ」に出会い、まずは絵画クラブで、絵の具やイーゼルを買い揃え、絵画に没頭する。その後、二眼レフ写真機を友人から譲ってもらい写真に没頭したが、しばらくしてここから 10 年程カメラから遠ざかってしまう。
1971 年 昭和 46 年	妻・百合子と結婚。9 月には岐阜に新工場が建設されたのをきっかけに岐阜へ転勤、社宅に住む。翌年には長女・えり菜が生まれる。この頃に念願のミノルター眼レフカメラを手に入れる。
1974 年 昭和 49 年	岐阜県揖斐郡大野町に待望の新居。翌年には長男・克彦が生まれる。自然風景や山郷を撮影していたが、この頃から被写体は家族など手にとるように増えていく。岐阜工場にも写真クラブを立ち上げ、社内に暗室設備を設置してもらい、より写真に没頭。引き伸ばし後の水洗いには洗濯機の水槽を使ったりもした。写友も晩年近くになってくると社内から地域へと広がっていき、地域のクラブにも顔を出すようになっていく。
2000 年 平成 12 年	フィルムカメラからデジタルカメラへと変わった頃、写友仲間 4 人で中国の上海、桂林、西安などへ毎年 4 年間連続で旅をし、その作品を県のふれあいホールで西美濃 4 人衆として写真展を開催した。そのほか個人的には、新潟松之山、松代、小千谷の棚田や裏磐梯を何度も通い詰めて撮影する。
2021 年 令和 3 年	新潟の棚田、山形の白川ダム湖の撮影を行う。

HAVE A NICE DAY.

焼肉とビールで ハツラツ !!

01

安藤 誠さん(75歳)

名古屋市在住／京都・横浜市出身

４年ほど前まで自動販売機を扱う会社に勤務していたため、京都に家族を残し、もう何年か忘れるぐらい名古屋に住んでいるという安藤さん。今は駐車場管理の仕事をしている。そんな安藤さんの元気の源は「くよくよしない」。楽天的な性格とポジティブ思考で「嫌なことがあっても一晩で、寝たら忘れるよ！」ってニッコリ。「あとは、焼肉とご飯とビール！それが最高の組み合わせですね」。今の夢は「コロナにかからず、楽しく余生を！」

夫婦仲良く 家族旅行で ハツラツ !!

02

髙橋 賢さん(86歳)

日進市在住／兵庫県神戸市出身

髙橋 晴美さん(82歳)

日進市在住／名古屋市守山区出身

賢さんは知的で生粋の阪神タイガースファン。晴美さんは明るい笑顔でみんなを照らす。そんなふたりの元気の源は娘家族とお出かけをすること。最近は軽井沢（長野県）や草津温泉（群馬県）に出かけた。夢は「いつまでも夫婦仲良く、孫が元気に育ってくれるのを見ること！」

作った野菜を孫に、
そしてひ孫たちが
食べる姿にハツラツ!!

03

河原 美津子さん(90歳)
豊川市在住／宝飯郡御津町出身

「食べとくれん」。手には収穫したばかりのナスやピーマン。冬に向けてはミカンを育て、これも近所の人らにお裾分け。河原さんは「毎朝、野菜がなっているか見に来るのが楽しいよ。それを孫たちが料理してくれて、ひ孫たちが食べてくれる。死ぬまで辞められないよ」と笑顔が弾む。50歳の頃までは三谷温泉(蒲郡市)の旅館の仲居を務めた。90歳を過ぎても、足腰は丈夫。「時代が変わったけど、若いもんにも農家をやってほしいねえ」と願う。

おしゃべりと
切り絵制作で
ハツラツ!!

04

榊原 司郎さん(74歳)
豊橋市在住／豊橋市出身

口を開けば、奥様から「うるさい。喋りすぎ」と言われる饒舌ぶり。そんな榊原さんの趣味は切り絵だ。仏像やペットなどを器用な手つきで表現し、教室で講師も務める。生徒とも「みんな、喋りながらやろう」と和気あいあい。若い頃からデザイン画を手掛け、今は新城美術協会の理事などを務める。元気の源は「綺麗な女性のいる京都に行くこと」。働き盛りの年代に「仕事をしながら徐々に趣味を楽しんで、定年になったら一気に楽しめ」と勧める。

大好きなわかめ！
食べても食べても
ズル剥けだぞ、おい！

加藤 善吉さん（75歳） 愛知県西尾市吉良町在住

三河湾の豊かな漁場でナマコやあさり、そしてわかめの収穫をしている漁師の加藤善吉さん。毎日妻・種子さん手作りの料理が食卓に溢れんばかりに並ぶ。
「男は黙って毎食どんぶりで白飯を食え」と食べ続ける姿は爽快だ。しかし大好きなわかめに言いたいことがある。
「俺は小さいときからわかめを食べているのにズル剥け、親父もズル剥け、おじいさんもズル剥け。おじいさんなんかハエも止まれないくらいズル剥けだった」

「遺伝で仕方ないか・・・」と大きな笑顔のまま、近くの小学校の草刈りに向かう。
「まだまだやりたいことがたくさんある。地元の道沿いに20万本の水仙を植えたい。吉良町宮崎のみんなは人情味があって大好きなんだわ。だから自分がやれることをやり切って恩返ししたい」
　ハツラツの源は地元のわかめと人情味あふれる仲間への想い。そして笑顔が素敵な種子さんの美味しい手料理。
「これくらいの品数が当然だろ？違うの？奥様いつもありがとう♡」

【還暦・古希野球】豊橋オールドボーイズ

生涯、野球小僧

Lifelong baseball kids.

**ボールを追う瞬間が楽しい。バットの芯でとらえた感触がたまらない。
ユニフォームに袖を通すひとときが生きがいだ。
年齢を重ねるごとに深まる野球愛。
豊橋オールドボーイズの選手たちのハツラツぶりを見よ。**

高校球児ほどの泥臭さはない。だからといって、プロ野球選手のような迫力はない。それでも、野球を心から愛する気持ちが、彼らの姿から存分に伝わってくる。還暦野球と古希野球に打ち込む選手たちは、まるで野球を始めたころの少年のような表情を見せてくれる。

打ち損じた打球がバウンドして内野手の正面を突いても、打者は一塁ベースまで駆け足だ。コントロールが狂い、四球で走者を抱えることもしばしば。だが、どんなに点を取られても、３アウトになれば仲間と笑顔でたたえ合いながらベンチへ引き上げる。打球がファウルゾーンへ飛べば、ベンチからゴルフにちなんで「OBだよ、OB！前に飛ばせよ！」と、シニアならではのヤジが飛ぶ。

ファンもいる。豊橋市内にある東田球場がホームグラウンドだが、地元に暮らすお年寄りが試合日に観戦に訪れる。試合が終われば、選手たちはタバコの煙をふかしながら、応援に訪れるお年寄りも交えて野球談議に花を咲かせる。チームに在籍する選手のほとんどが学生時代や社会人で野球経験がある。尾崎時雄さんは元中日ドラゴンズの投手だ。意見をぶつけ合い、時にはついヒートアップしてしまうが、最後には「言い過ぎて悪かったね」と笑顔で仲直りだ。

昨年はコロナ禍で、還暦リーグも古希リーグも全面的に中止となった。さらに、今年は５月に出場を決めていた和歌山県での西日本古希大会がなくなり、４月から再開していたリーグ戦も緊急事態宣言発出のため、一時中断となった。

５月下旬、東田球場で予定されていたリーグ戦も延期となった。それでも、豊橋オールドボーイズの選手たちはユニフォームに袖を通し、集まった。還暦と古希のチームに分かれ、紅白戦を戦った。還暦チームの監督を務める菰田茂雄さん（66）は「僕たちは年齢が年齢だけに、１年１年が大きい。練習試合でもいいから、１試合でも多くプレーがしたいね」と思いを明かした。

今年の前期リーグ戦、県内７チームが参加している古希では、豊橋は６戦全勝で見事優勝を果たした。12チームが戦う還暦でも６月末までの時点で６勝１敗１分で、首位タイと好調だ。

高齢となればなるほど、怪我と病気は付き物だ。プレーができなくなっても、審判やスコアラーなどに転身し、チームのサポート役となる。

体調を崩し、しばらく活動を休んだり、退部してしまう仲間もいるが、それでも、春になれば有望な新しいメンバーが加わる。ベテラン勢は、定年を迎えたばかりのルーキーたちの若々しい動きに刺激を受け、心の火をメラメラと燃やす。

若いもんに負けてたまるか――。

昔、叩き込まれた闘争心は、いつまでも消えることはない。

野球こそが元気の源。野球こそが人生。体が動き続ける限り、ボールを追い掛ける。

**やっぱり、野球は楽しいね。
出来れば、死ぬまでやりたいね！**

ねんりんピック岐阜2021

岐阜にシニアのオリンピックがやって来る。
「ねんりんピック岐阜 2021」こと、第 33 回全国健康福祉祭ぎふ大会が
10 月 30 日から 11 月 2 日までの期日で、岐阜県内で開催される。
県内 42 の全市町村で、63 種目が開催される。観衆も合わせて 60 万人が集まる一大イベントだ。
年齢を感じさせないハツラツとした勇姿を観に行こう。

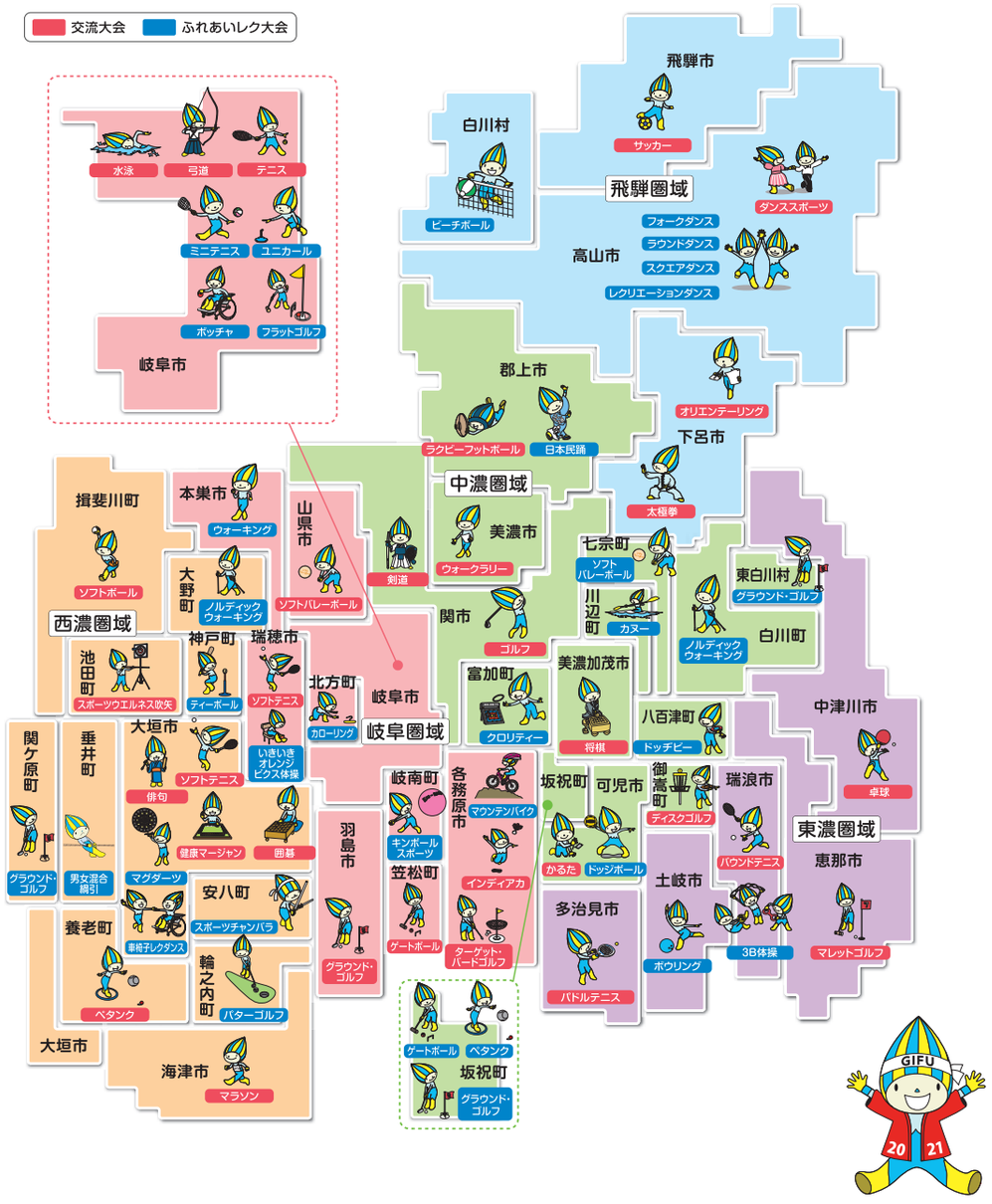
ねんりんピックはスポーツ、文化、健康と福祉の総合的な祭典。ソフトボールやゲートボール、マラソンといったスポーツ交流大会10種目、ディスクゴルフやウォークラリー、オリエンテーリングやスポーツウエルネス吹矢などのふれあいスポーツ交流大会16種目、俳句やかるた、将棋などの文化交流大会5種目、車椅子レクダンスやボウリング、パターゴルフなどのふれあいレク大会32種目が行われる。都道府県や政令指定都市の代表となった選手が出場する交流大会は史上最多の31種目が予定される。

10月30日に岐阜メモリアルセンター長良川競技場で総合開会式が行われ、会期中には高齢者向けの運動法や健康管理を啓発する健康づくり教室や健康フェア、美術展やファッションショー、音楽文化祭や講演会など多彩なイベントも行われる。

毎回、地域や世代を超えた交流の輪が広がっている、ねんりんピック。厚生労働省創立50周年を記念して、1988年に兵庫県で第1回大会が開催されて以来、歴史を積み重ねてきた。本来、岐阜大会は昨年開催されるはずだったが、新型コロナウイルスの影響で1年延期されていた。

シニアたちの若々しいプレーが、岐阜を、東海地方を、そして日本中を熱く盛り上げる。

会場地一覧



誰もが平等に歳をとり、誰にでもやってくる 65 歳からのシニア世代。
これからどんな心構えでシニアを迎えたらいいのだろう？
ただワクチンを待つだけがシニアじゃない。
そこにはまだ ” 終わらない青春 " を謳歌している姿が。
我々 20 代〜 40 代のスタッフにとって、読者にとっても
人生のヒントになったらいいなという想いで創刊しました。
風のように軽やかに歳を重ねていく姿は美しい。

最後に　ある 95 歳の老人の詩から引用＞＞

もう一度人生をやり直せるなら・・・・
今度はもっと間違いをおかそう。
もっと寛ぎ、もっと肩の力を抜こう。

絶対にこんなに完璧な人間ではなく、
もっと、もっと、愚かな人間になろう。

この世には、実際、それほど真剣に思い煩うことなど 殆ど無いのだ。

もっと馬鹿になろう、もっと騒ごう、もっと不衛生に生きよう。

もっとたくさんのチャンスをつかみ、
行ったことのない場所にももっともっとたくさん行こう。

もっとたくさんアイスクリームを食べ、
お酒を飲み、豆はそんなに食べないでおこう。

もっと本当の厄介ごとを抱え込み、
頭の中だけで想像する厄介ごとは出来る限り減らそう。

もう一度最初から人生をやり直せるなら、
春はもっと早くから裸足になり、
秋はもっと遅くまで裸足でいよう。

もっとたくさん冒険をし、
もっとたくさんのメリーゴーランドに乗り、
もっとたくさんの夕日を見て、
もっとたくさんの子供たちと真剣に遊ぼう。

もう一度人生をやり直せるなら・・・・

だが、見ての通り、私はもうやり直しがきかない。
私たちは人生をあまりに厳格に考えすぎていないか？

自分に規制をひき、他人の目を気にして、
起こりもしない未来を思い煩ってはくよくよ悩んだり、
構えたり、落ち込んだり…

もっとリラックスしよう、
もっとシンプルに生きよう、
たまには馬鹿になったり、無鉄砲な事をして、
人生に潤いや活気、情熱や楽しさを取り戻そう。

人生は完璧にはいかない、だからこそ、生きがいがある。

INFO&OURS

募集中!!

「ハツラツ」で取り上げてほしい65歳以上の元気なシニアの方々を探しています。
自薦、他薦、問いません。お知り合いやお近くに「こんな人がいる」といった情報もお待ちしております！
また、当フリーマガジンを設置してくれるお店や施設がありましたら、お気軽に下記までご連絡ください。郵送で発送させていただきます。

ハツラツができること

あなたのオリジナルブック作りませんか？
「団体やチーム、イベントなどの写真を撮ってほしい」
「子どもや孫の音楽会の映像を撮って編集してほしい」
「ホームページを作ってほしい」
など、なんでもお気軽にご相談ください。

お問い合わせ先

ハツラツ編集部
愛知県名古屋市中区錦2-10-8　301
TEL&FAX / 052-222-6002
MAIL　info@ha2ra2.jp
WEB　https://www.ha2ra2.jp

編集長　Hiroki“route66”yoshimoto
編集　Masao“machao”Anno
Chinatsu“cheer”Mizobata
Katsuhiko“ana”Kitagawa
デザイン　Keisuke“praything”mizuno
Kazunori“quick”ito

発行元　ハツラツ

2021年9月1日発行

YouTube　Instagram

HA2...RA2

The Bloom
of
Youth!
HATSURATSU PRESS